研究発表　分科会 10-2　造形の変位 10 月 15 日（日）17：10-17：50　南館 2B42

リチャード・ハミルトンの《The critic laughs》
―― 1968 年の「プリント」と 1971-2 年の「マルティプル」をめぐって

宮城学院女子大学　吉村 典子

英国の美術家リチャード・ハミルトン（1922-2011）は、ポップ・アートの先駆的存在として広く知られた人物であり、その後、様々な展開を示すも、伝統的な美術を常に意識していたことでは一貫している。従来の美術領域では扱われなかったものを扱い「芸術の哲学的矛盾に組み込むこと」への関心を、写真使用についての 1969 年の論考で彼は述べている。同じ頃、彼は量産の製品としてのプロダクトに接近する。

2003 年ロンドンで、ハミルトンの「プロダクト」をテーマとした展覧会が開催されたが、作品展示とハミルトンの「プロダクト」にかかる言説紹介に留まるものであった。一方、ハミルトンの作品には、同じプロダクトを扱うものでも、作品により異なるアプローチが見られるため、一点一点について考察する必要がある。そこで、本発表では、プロダクトの中でも、ドイツの家電メーカー・ブラウン（以下ブラウン社と表記）の製品と関係する作品に焦点を当て、その中でも《The critic laughs》を考察する。《The critic laughs》には、ブラウン社の電動歯ブラシがモティーフに用いられ、同タイトルで二種の作品が、異なる時代に発表されている。

1968 年に制作された《The critic laughs》は、ハミルトンが「プリント」と呼ぶもので、リトグラフ等に、コラージュや手彩色等の複数の技法を組み合わせたものである。モティーフは、ブラウン社の電動歯ブラシ本体に、ハミルトンの息子が旅先で手に入れたという入れ歯型の砂糖菓子を、歯ブラシの代わりに差し込んだものである。これを写真撮影したものをもとに、上記の技法で作品を完成させている。マルセル・デュシャンのレディメイドからの触発のみならず、歯ブラシとの関係から、ジャスパー・ジョーンズの《The critic smiles》を想起し、タイトルを《The critic laughs》にしたとハミルトンは言う。こうした思想的重層性のみならず、実見により明らかになったことは、作品の制作工程にも重層性があり、そこには「プリント」の形式への批判的思考も含まれている点である。

もう一つの《The critic laughs》(1971-2 年)は、「マルティプル」としてつくられたものである。ハミルトンは、歯科医等に依頼し、入れ歯型の砂糖菓子の部分と同形のものを、プラスチックで作らせた。それを電動歯ブラシの本体に接続し、電源を入れると振動が開始する。そして、専用のケースを、ブラウン社の電気シェーバーの典型的なケースを想起されるデザインでつくっている。1980 年には、このマルティプルのための CM もハミルトンは作成し、BBC の美術番組で放映している。

以上、2 種の《The critic laughs》には、プロダクトおよびそれに係る領域に限りなく迫ろうとする点が見て取れる。本発表では、美術作品でありながら、プロダクトであろうとするハミルトンの思考と手法を、これら二種の作品を通して明らかにする。